病院外への買い物プログラムの取り組み

～長期入院患者への退院支援に向けて～

平成22年11月12日

医療法人社団　五稜会病院
○佐々木幸恵、櫻井真紀子、谷口沙妃、泊り由希子、継田匠、数土郁子、安田枝里、矢崎秀幸、中島公博

1、はじめに

- これまで様々なリハビリプログラムを工夫してきたが、閉鎖病棟では患者が退院後の生活をイメージできるプログラムを準備することは難しかった
- 退院後の生活に重要な“買い物”に着目し、入院が長期化し外出が少なくっている患者を対象に『買い物プログラム』を立ち上げた。
- その結果、外で生活することへの喜びや楽しさを提供することができ、患者・支援者で今後、 伸ばしていきたい能力や課題を共有し、新たな目標が明確化されたので報告する。

2、病院概要

- 五稜会病院

所在地：北海道札幌市
診療科目：　精神科、心療内科、内科、消化器科
病床数：193床
　療養病棟A：54床
　療養病棟B：53床
　急性期病棟：38床
　ストレスケア・思春期病棟：48床

●療養病棟B（閉鎖病棟）
年齢層：20～70代
入院期間：1年・5年未満・・・ともに4割
5年以上・・・2割
主な疾患：統合失調症や気分障害など

作業療法について
実施頻度：主に月～金曜日
午前・午後の各2時間
病棟専属作業療法士：2名
内容：運動療法、創作活動、音楽療法、レクリエーション、集団活動など
→1日約8割の方がOTに参加する。

3、スタッフがプログラムに期待する事

効果1：期待する事

生きがい、幸福感
楽しさ　喜び　活気
満足感　心地よさ　選択の自由

効果2：把握したいこと

金銭管理　集団行動　社会行動面

【実施状況】　全6回
延べ人数:20名

行き先	所要時間（移動）	参加者数	スタッフ数
コンビニ	1時間（5分）	3名	3名
コンビニ	1時間（5分）	4名	3名
スーパー	1時間（10分）	4名	3名
コンビニ	1時間（5分）	3名	3名
ドラックストア	1時間半（20分）	4名	3名
コンビニ	1時間（5分）	2名	2名

4、買い物プログラム支援の流れ

実施前

対象者の抽出
・日時や場所の選択
・外出が少ない長期入院患者を対象に作業療法士、看護師で検討

確認事項：10名中8名が医療保護
・本人の意思
★スタッフが考える「プログラムを活用してほしい人」と、外に買い物行きたい人の不一致
★プログラムを活用してほしい人への誘い方に苦労・工夫を要した。
・主治医からの外出許可
・家族からの外出許可

オリエンテーション
・当日の説明、約束事

当日

出発前
・参加者の状態確認。
・同行スタッフの数や配置の打ち合わせ
・降金

外出
・当院近隣のコンビニ、スーパーまで買い物

帰棟後
・荷物や残金の確認と再入金
・同行スタッフ同士の振り返り
・参加者との振り返り
・他スタッフへの報告と情報共有

5、プログラム前後の感想

実施前

患者
●どんな服や靴に履き替えればいいのか
●何が売っているかわからない
●お金はどれくらい持っていけばいいのか・・・
●外に行けることに期待

支援者
●楽しさを感じてもらえるのか
●支払いはできるだろうか
●集団行動はできるだろうか
●外の刺激に耐えれず途中パニックにならないか
●普段の入院生活ではみせない、行動は起きるのかな

実施後

●外出、買い物できた事が満足
●買い物は楽しい
●商品の選択できない
●概算が出来ない
●体力がない

●外出や買い物することで楽しみや満足感に繋がる事が分った。
●入院生活では見せない行動がみれた
●支払いや集団行動は予測していたより出来ていた

6、参加者と実施の状況　全10名　平均入院期間5.2年

氏名（参加回数）	年齢	年齢	入院期間	病棟内で見られる参加者の特徴	実施後の様子	見えた課題や能力
A氏（1回）	躁鬱病	60代（男性）	12年医保	状態不安定で、他者の言動に刺激を受けやすい。	楽しかったと満足感を得ていた。	概算、移動時の集団行動に困難さがみられた。
B氏（5回）	統合失調症 最多参加者	40代（女性）	2年医保	自己決定が苦手で、依存的。自室で過ごし、控え目で活動性が低い。	表情に笑顔が見られるようになった。	毎回、移動中に疲労を感じ、体力不足を訴える。
C氏（3回）	統合失調症	30代（女性）	3年医保	問題点を話す事は出来るが、具体化し目標へ結び付ける事が困難。	季節感や買い物に達成感を味わっていた。	移動時の集団行動に困難さがみられた。
D氏（1回）	統合失調症	60代（男性）	3年医保	状態は安定しており、病棟環境に適応している。	久しぶりの外出を喜んでいた。	概算がうまくできなかったことを振り返る。
E氏（2回）	統合失調症	60代（女性）	1年医保	妄想言動がみられているが、活動性は高く自発的な対人交流が出来る。	外出、買い物した事を喜んでいた。	商品、場所に不慣れで緊張感や不安感が見られた。
F氏（2回）	統合失調症	30代（女性）	8年医保	活動性低く、普段は臥床がちに過ごす。	久しぶりの外出を喜んでいた。	1回目の帰棟後、気分が高揚し活動的になる。
G氏（1回）	統合失調症	50代（女性）	9年任意	病棟環境に怒りを生じやすい。希望通りに外出できない事に不満を抱く。	品物の多さや、ほしいものを買えたと喜んでいた。	品物に目移りし、たくさん買い込もうとする。
H氏（2回）	統合失調症	40代（男性）	5年医保	適切な表現での意思表出が困難。現実的な要求ができない。	買い物への行動意欲がわいていた。	商品選択に時間を要する。会計額を予想できない。
I氏（3回）	躁鬱病	50代（男性）	2年医保	活動性が高く、病棟では患者さんのリーダー的存在である。	久しぶりの外出を喜んでいる。	金銭、集団、社会行動に問題は見られなかった。
J氏（1回）	統合失調症	30代（女性）	7年任意	妄想の影響が言動に強く出ている。自室で過ごすことが多い。	ほしい物が買え、満足感を得ていた。	概算、計算が全く出来なく。

7、結果と考察

1、外出することへの喜びや、買い物を楽しむ姿が見られた。
→外での社会生活の楽しさや達成感に繋がったと考える。

2、外の社会生活を体験し、個々が退院後をイメージする機会を通じて、今後のリハビリについてのより具体的な現実感のある目標が立てられた。
→患者、支援者の両者で残存能力や新たな課題を意識化することが出来た。目標が明確化されお互いの間で共有しやすくなった。

3、これにより患者の日常生活に変化が生じたり、他のリハビリプログラムへの参加が見られるようになった。
→目標が現実的で前向きなものとなり、以前よりも治療への目的意識を強まった。

8、まとめと課題

- 閉鎖環境は安定化を促進する反面、単調な生活のデメリットも大きい。外の環境の自由さ、楽しさ、活気や生きがいを患者に実感してもらう機会を提供していくことは重要である。
- この楽しさを伝えたい患者のほうが、プログラムを拒否する傾向があった。今後は患者の再評価を行い、興味を引き出す誘い方を工夫していきたい。
- 買い物プログラムは患者もスタッフも現実に向き合う場として重要であった。今後も継続し、生活の楽しみ、喜びを感じる機会を通して、退院後の地域生活をイメージ出来るよう支援したい。